

「変わる時代に変わらぬ土台」
テモテへの手紙第二 3 章 14～17 節

子母口キリスト教会 松井史音

私たちが日々の生活を送る中で、何かを判断するとき、何を基準にしているでしょうか。ニュース、SNS、世間の常識、経験、あるいは周囲の声、私たちは多くの情報に囲まれており、時には何を信じ、何に立てばよいのか迷うことがあります。そのような中で、聖書が、私たちの人生の道しるべとして与えられています。今日の聖書箇所は、「テモテへの手紙第二」3 章 14～17 節です。この手紙は、使徒パウロが若き伝道者テモテに宛てて書いたものですが、内容は単なる個人的な励ましにとどまらず、すべての信仰者に向けられた神の言葉の大切さと、その力について教えているものです。

聖書には手紙の形式で書かれた文書が多くありますが、それらの多くは初代教会の人々への教え、励まし、警告、そして信仰の教理を教えるために記されました。特にこの「テモテへの手紙第二」は、パウロの最後の書簡の一つであり、まさに殉教を目前にしたパウロの遺言のような重みを持っています。

パウロとテモテの関係は、単なる同労者を超えて、親と子のような深い信頼関係にありました。パウロは、若いテモテに信仰の本質と、困難な時代にあっても揺るがぬ信仰の土台について語ります。テモテは今、困難な教会の中で指導者として立っており、その働きを続ける上で、何を基盤とするのか、この問いに対してパウロが語った答えこそ、「御言葉にとどまること」でした。

私たちもまた、この時代の中で、自分自身の信仰の土台を問い直されることがあります。社会の価値観が大きく揺れ動く中、家庭でも職場でも教会でも、私たちは「何に立って生きていくのか」が問われています。

今日の聖書箇所を通して、「神の言葉にとどまり、御言葉によって整えられる」ことの意味を、共に見つめていきたいと思います。そして、テモテへの励ましが、私たち一人ひとりへの励ましとして受け取られますように。この御言葉の中に、神が私たちに与えておられる真の知恵と希望を見出していきたいでしょう。

1.

14 節「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい」

この言葉は、単なる忠告や助言ではなく、パウロの切実な願いが込められた命令形の勧めです。「とどまっていなさい」とは、意識的に留まる、選び取り続けるということです。テモテはすでに信仰の教えを学び、それを「確信」していました。ここでの「確信」とは、ただの理解や納得ではなく、自分の全存在をかけて受け止めている状態を意味します。

では、なぜパウロはあえてこのように語るのでしょうか。それは、信仰を持って生きることが、決して平坦な道ではないからです。むしろ信仰に生きる者は、時に誤った教えや世の誘惑、試練や苦難にさらされるのです。実際、このテモテへの手紙第二は、偽教師や信仰の危機について繰り返し警告を発しています。

だからこそパウロは言うのです。「あなたが確信した信仰にしっかりとどまれ」。そしてその信仰は、どこかで偶然に手に入れたものではなく、信頼できる人たちから受け取ったものだと言っています。

テモテはパウロだけでなく、祖母ロイス、母ユニケという信仰深い家族からも信仰の教えを受けました。その歩みの背後には、家族の祈り、模範、証しがありました。私たちも、自分自身の信仰のルーツを思い起こすことが大切です。誰かの祈り、誰かの言葉、誰かの手によって、今の私たちは信仰へと導かれたのです。

私たちもまた、次の世代に信仰を手渡していく者として、御言葉にとどまり続ける必要があります。教会の子どもたち、家庭の子どもたち、そして周囲の若い世代に、しっかりと信仰の確かさを証ししていけるよう、私たち自身が「確信にとどまる者」でいましょう。

15 節「また、自分が幼いころから聖書に親しんできたことも知っているからです。聖書は知恵を与えて、キリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができます。」

15 節には「幼いころから」と書かれています。先ほど話したように、テモテの家庭には、信仰を持った祖母と母がいました。そのため、幼いころから聖書を教えられて育ったのです。ここでいう「聖書」は主に旧約聖書を指し、その核心にはキリスト・イエスについての啓示があります。ここで言われている「知恵」とは、救いについての教えのことです。人は聖書から救いについての「知恵」を得て、キリスト・イエスを信じる信仰へと導かれます。そして、その信仰によって救いにあずかるのです。きっと、今日教会に来られている方、またオンラインで参加されている方の中には、テモテのように幼い頃から聖書に親しんできた方がいるかもしれません。

16 節「聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」

ここで言われる「神の靈感」($\theta \epsilon \acute{o} \pi \nu \epsilon \upsilon \sigma \tau \omicron \varsigma$)という言葉は、「神の息吹による」とも訳され、「神が吹き込んだ言葉」という意味です。聖書は完全に神の言葉でありながら、人間の文化や文体、言葉を通して書かれたものです。つまり、神の靈感とは、聖書は人間によって書かれたものでありながら、神さまの意志を神さまご自身が著者として吹き込まれたものだということです。もっと簡単に言うと、聖書は、「神さまが人に教えたいことを、人が神さまの助けを受けながら書いたもの」だということです。だからこそ、聖書は「教えと戒めと矯正と義の訓練」にとって有益なのです。それは、それが神さまご自身から来たものであるからこそ、信頼に値するのです。そして、御言葉は、私たちを育て、整え、派遣するためにあります。私たちは日々、この御言葉を通して、神さまの似姿に近づいていくよう造り変えられていくのです。

17 節「神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられた者となるためです。」

ここでの「神の人」($\acute{o} \tau \omicron \upsilon \theta \epsilon \omicron \upsilon \acute{\alpha} \nu \theta \rho \omega \pi \omicron \varsigma$)とは、牧師や宣教師など特別だけを指すではありません。神さまを信じるすべてのクリスチャン、つまり私たち一人ひとりのことです。信仰者は神さまに属しており、その神さまの働きのために整えられるべき存在です。「十分に整えられた」($\epsilon \xi \eta \rho \tau \iota \sigma \mu \acute{\epsilon} \nu \omicron \varsigma$)という言葉は、必要なものを全て備えたという意味があります。つまり「ふさわしく、十分に整えられた者となる」とは、これは単に知識を持つだけでなく、実際の行いにおいても神さまの御心になう働きに適った者となることを意味しています。それは職場や家庭内、学校、教会など、どの場面においても神さまの望まれる働きをする人になる、ということです。そして、聖書は私たち一人ひとりが、神さまの求めておられる働きにふさわしい器として整えられるための土台であり、力なのです。私たちが御言葉に真剣に向き合うとき、神は私たちをその御業のために用いようとされるのです。

聖書は神の靈感、神の息吹によって与えられたものであり、信じる者を「霊的」にも実際の働きにおいても完全に整える力を持っています。これによって私たちは、神さまの働きのために備えられ、様々な場所へ派遣される者へとなるのです。ここまで見てきたように、聖書は私たちにとって、ただの知識や情報を与える書物ではありません。私たちの人生を変える力があり、神さまの働きのために備える道具として用いられるものです。信仰

とは、単なる感情や考えの一致ではなく、神の言葉に根差し、日々の歩みの中で鍛えられ、形づくられていくものです。

たとえば、仕事で難しい判断を迫られる時、家庭で子育てに悩む時、人間関係で傷ついた時——そのようなとき、私たちはどこに立ち返るのでしょうか。自分の力や過去の経験、世間の常識に頼ろうとすることもあります。しかし、信仰者はまず神の言葉に立ち返るのです。聖書は、私たちの心を照らし、神さまの目から見た正しい判断、正しい歩み方を教えてくれます。

16節にあったように、聖書は「教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益」です。この中の「教え」は、私たちが何を信じるべきかという指針を与えます。「戒め」は、誤った道に入ったときにそれを警告してくれます。「矯正」は、間違った方向を正し、元に戻す力です。「義の訓練」は、神さまの御心にかなう生き方を習慣として私たちの中に築く助けをします。つまり、聖書は単なる“知るため”の書ではなく、“生きるため”の書なのです。

ですから、信仰を持って生きていく上で、聖書を読まずして進むことはできません。聖書を読むことで、私たちは神さまとの対話を続けることができるからです。祈りが私たちから神さまへの語りかけであるならば、聖書は神さまから私たちへの語りかけです。この両方あって、信仰は育っていきます。

また、17節にあるように、「神の人がすべての良い働きにふさわしく、十分に整えられる」ことが私たちの目指す姿です。この“良い働き”とは、教会での奉仕だけを指しているわけではありません。家庭での働き、職場での誠実さ、地域社会での隣人を愛する働き、友人との信頼関係、すべての場において神さまが私たちを通して何かをなさそうとしておられるのです。だからこそ、私たちはどこにあって、神さまに用いられる備えが必要なのです。

その備えの第一歩が、日々の御言葉への取り組みです。どれだけ多忙な日々の中にあっても、ほんの10分でも5分でも御言葉を開き、神さまの語りかけに耳を傾けるなら、私たちは確実に整えられていきます。逆に言えば、御言葉から離れた信仰生活は、根のない木のように、少しの風で倒れてしまいます。

そしてこの御言葉は、個人だけで読むのではなく、教会の交わりの中でも深めていくことが重要です。教会は御言葉を共に読み、共に励まし合い、共に祈る場所です。ときには互いに戒め合うこともあるかもしれませんが、それは私たちが共に「神の人」として整えられ、共に成長していくための大切な恵みなのです。

また、私たちの周りには、まだ聖書に触れたことがない人々がたくさんいます。日本の社会では、聖書を読んだことがない人、読もうとしたことがない人の方が圧倒的に多いの

が現実です。だからこそ、私たち一人ひとりが「生きた聖書」として、その御言葉の実を実生活の中で現していく責任があります。

〈結論〉

聖書を読んでいる人の言葉、祈っている人の言葉、神さまに信頼して生きている人の姿には、やはり重みがあります。それは周囲の人々にとって、キリストの香りとなり、福音への橋渡しになるのです。テモテが祖母ロイスと母ユニケから信仰を継承したように、私たちの信仰も誰かの心に種を蒔くものになるのです。

このように、聖書が私たちに与えられていることは、何と大きな恵みでしょうか。神の靈感によって与えられ、真理の光であり、私たちを整える器具であり、信仰の土台であり、救いに導く知恵そのものです。この御言葉に日々親しみ、深く根ざしていきましょう。

最後に、パウロのこの手紙を受け取ったテモテの姿に思いを馳せてみましょう。彼は若く、重い責任を担っていました。教会を導く中で、きっと不安やプレッシャーも大きかったことでしょう。しかし、彼は御言葉に立ち、信仰に立ち、パウロの励ましを受け取って前進していきました。

私たちもまた、テモテのように、それぞれの置かれた場所で御言葉にとどまり、神さまの整えを受け、良い働きにふさわしい者として歩んでいきましょう。

「けれどもあなたは、学んで確信したところにとどまっていなさい。」このパウロの勧めの言葉を、今週の歩みの中で思い起こし、神の御言葉に根ざした信仰生活を共に築いていきましょう。どんな時代であっても、御言葉は決して変わることがありません。この御言葉の上にしっかりと立って歩む時、私たちもまた、主に用いられる「神の人」として整えられていくのです。